

# 医芸俳壇



長野 有泉七種

東京 篠田那加

墓だけが残る故郷も豊の秋

師走興行浅草公会堂忙し

露の香に五体おぼる花野かな

吾卒寿数十枚の賀状受く

しみじみと見つめて淡し帰り花

妻逝くも柚子湯の家訓今に守る

休耕の田にして蕎麦の花盛り

北国は雲南国土佐晴れる

死に神に覗かれてゐる霜夜かな

木枯しや親子で結ぶ祈願札

青森 朝霧朝光

里山に灯の洩れている夜なべかな

もてなしと言ふも眞の飯なりし

逢えばみな山の顔して眞狩

足湯して仰ぐ岩木嶺鳥渡る

銘銘に押し黙りゐる眞狩

千葉 秋葉琢磨

冬の蜂一日一日と生きて來し

冬日和声高高く魚市場

寒々焼畠土も映れる帰り道

朝時雨電話の止まぬ当番医

冬めくやインフルエンザに今日も終ゆ

アマサギの群月光を渡りけり  
燈台へハクセキレイに導かれ  
今日も逝くアオアシシギの挽歌かな  
さう氣なく岸辺はなれるヒドリガモ  
斜里港に雪を呼びよせコオリガモ

静岡 岩本漂人

又折れる泥田の一人蓮根掘る

朝風呂は三十九度秋梅雨

とりじりの冷酒並べて春炬燵

かしましき帰省の朝の鳥の声

雌大が雄大になる口永かな

新潟 中村雄彦

飛行船師走に低く流れけり

ツエツペリン昔の空に浮んでた

年賀状出せるかどうか思案用

ビタニンのおかげか友とまだ文通

辞書を手に俳句捻出年の暮

東京 小南丁字

蟻の群れ熱中症の蟻仕分け

銀リング皆既日食蟻しぐれ

秋の海家族陸下の膚をいく

光濃く紫芋部屋の彩

森繁さん紋付で逝き秋の華

東京 田村豊幸

飛行船師走に低く流れけり

ツエツペリン昔の空に浮んでた

年賀状出せるかどうか思案用

ビタニンのおかげか友とまだ文通

辞書を手に俳句捻出年の暮

長野 楢本 勝彦

兵庫 廣辻 逸郎

東京 福富 清子

ハワイアン衣裳明るきクリスマス

冬それやゲーム丸る組太鼓

顎張つて王将歌ひ年送る

老け果てど口ほくばくと歌焚火

しへるや万羽の鴉ビル占拠

殿様も奴も煙草秋祭り

青い瞳の腰元も「秋祭り」

秋の陽に映えて新婦のママヨリ

ハゲルのメール入り年あらた

今年切りと言ひ妻の年用意

東京 初芝 澄雄

青森 福士 盛大

青森 三上 忠英

白波寄す駅伝選手湘南を  
新春の氣を振り撒きて選手行く

富士の山白銀の嶺美しく

上り坂駅伝健脚箱根山

雪明かり大気に揺れるズバルかな  
テレビではハワイ 沖縄雪深し  
はなやかなマフラーたらして登校す

雪女孫に話せど馬耳東風

冬ばらや恋邊でひそか香放つ

早々と出度き知らせ大旦  
どり島子ふりつと来ては注連飾る  
親父よりぶつきほづなお年玉  
新春の灯をあかあかと点しけり  
命名は親父の出産願書始

芦ノ湖に紺碧に映つ富士ヶ嶺

東京 福神 規子

(東京) 粗木 秀穂

その音楽式の宮に初詣

老いてなほ揖ひしを謝し初詣

年ごとに淑氣薄れてゆくごとし

頼もしき青年となり礼者たり

老い故に敬まはれたる三日かな



東京 福富 清子

冬菊やみなみの兵の墓  
秋澄むや薩摩切子は海の色  
轟沈と記す血書のすさまじく  
城跡の枡形に降る落葉かな  
蓮の実の飛び残りたるままに枯れ

老い故に敬まはれたる三日かな

弊衣破帽の兄見え隠る冬木立  
年行くや銀座に写経の筆選む

新幹線の窓に灯流る年ながら  
頬杖を三面鏡に去年今年

車椅子より刀自礼賜ふ淑氣かな

